

謎の鉄拳女子

学生運動

春日信彦

鉄拳女子

コロнда君は、ドタドタドタと廊下が壊れんばかりの足音を響かせお菊さんの書斎に飛び込んだ。書斎で週刊文芸の連載を書いていたお菊さんは、ついに東京にも地震が起きたと勘違いし、キヤ〜と悲鳴を上げ、机の下にもぐりこんだ。バサッとふすまを開いたコロнда君は、大声で叫んだ。「お菊さん、ビッグニュースですよ」机の下で頭を抱えて震えているお菊さんを見つけたコロнда君は、トーンを落とし、からかうように話しかけた。「お菊さん、そんなところで、何やってん、ですか？」

地震ではなかったとホッとして机の下からのそっと出てきたお菊さんは、やんちゃな子供のようドタドタと足音を立てて駆け込んできたコロнда君にあきれた顔で嫌味を言った。「坊ちゃん、なんですか、子供じゃあるまいし。もう、立派な国会議員ですよ。紳士らしく、静かに歩けないのですか。まったく、坊ちゃんは、子供なんだから。あ〜あ、やっぱし、しつげが甘かったんですかね。これというのも、私の責任です。情けない」

血相を変えて飛び込んできたコロнда君は、いつもの嫌味は聞き飽きたと言わんばかりに、お菊の言葉に耳も傾けずそそくさとクジャクが描かれた黒檀の楕円形テーブルに向かった。そして、ドスンと腰を落としドヤ顔で胡坐をかいた。「ちょっと、お菊さん、そんなところに突っ立っていないで、ここに座ってくださいよ。目ん玉が飛び出るような、今世紀始まって以来の一大事件なんです。お菊さん、腰を抜かさないでくださいよ。さあ、早く、お菊さん」

お菊さんは、大げさなビッグニュースを心弾ませ聞くのだったが、聞いてみるとまったく取るに足りないちっぽけな話で、いつもがっかりさせられていた。お菊さんは、軽蔑の眼差しで静かにコロダ君の前に正座するとさらなる嫌味を発した。「何が、一大事件ですか。坊ちゃんは、世間知らずですから、何から何まで、一大事件なんです。AIがプロ棋士に勝ったとか。3.11は人工地震だったとか。金メダルは、銀メダルに金メッキだったとか。T大が、地下で原爆を作っていたとか。まあ、そんなところでしょ」

バカにされたコロダ君は、この特ダネを話すのをやめようかとも思ったが、このまま黙っていると寝言で叫んでしまうような気がして、やっぱ、話すことにした。今のところ、マスコミも口封じされている情報で、それほど世間をにぎわせるチョ～特ダネだった。「お菊さん、まあ、そう、僕をいじめないでくださいよ。確かに、僕は、世間知らずです。でも、今回ばかりは、本当に、腰を抜かすほどの特ダネなんです」

まったく信用していないお菊さんは、「もう、そのセリフ、耳にタコができるほど聞きました。まあ、退屈しのぎに、お茶でも、飲んで、その特ダネというのやらをお聞きいたしましょう」と言い終えると、すっと立ち上がり、部屋を出て行った。しばらくすると、輪島塗の金粉がちりばめられた丸いお盆を殿様に差し上げるかのように胸の高さに据えて厳かに運んできた。そのお盆の上のブルーを基調とした深川製磁の急須と二つの湯のみ茶碗は、美しさを競い合い、自分の出番を待っているかのように思われた。

ゆっくり腰を下ろし正座したお菊さんは、コロンド君の前に静かに湯呑を差し出すと玉露茶を静かに注いだ。そして、自分の湯呑にもお茶を注ぐと茶道の心得があるお菊さんは、すました顔で湯呑をそっと持ち上げ左手を湯呑の底に添えると、目を細めてほんの少しすすった。湯呑を茶たたくに静かに置くと声をかけた。「それではお伺いいたしましょうかね。坊ちゃんの腰を抜かすという特ダネとやらを。期待は、しておりませんけど。さあ、どうぞ」

眉間にしわを寄せたコロンド君も、一口お茶をすすり、大きく深呼吸をした。目をパチクリさせたコロンド君は、お菊さんの目をじっと見つめ話し始めた。「この話は、例のA新聞記者から極秘に入手したもので、まだ、マスコミも報道していない情報です。今、沖縄の東村高江（ひがしそんたかえ）で住民たちによるヘリパッド建設反対がなされているでしょ。住民たちは、工事車両を通さないため座り込みをしているんですが、警察官が抵抗する彼らを強制排除している最中に、大事件が起きたんですよ」

その事件は、ツイッターで頻繁に流れていたもので、お菊さんも承知していた。「知ってますとも。警察官が、座り込みをしていた女性を排除するときに胸やお尻を触って、痴漢まがいなことをしたとか、しなかったとか」神妙な顔をしたコロンド君は、話を続けた。「まあ、ちょっと関係があるんですが、なんと驚くなかれ、座り込みをしていた可愛い女子学生が、彼女を排除しようとした二人の警察官を殴り倒したらしいんです」

お菊さんは、大きく目を見開いて、歓喜の声を上げた。「やるじゃない。あっぱれ。見上げたもんだわ。下品な行為だけど、今の女子は、そのくらい、強くなくっちゃね。別に、驚くことじゃ～ないんじゃない。ほんと、坊ちゃんの話は、つまんないんだから。どこが特ダネよ。女子ってのは、身体を触られると、防衛本能が働いて、凶暴になるものなのよ。よ～～く、憶えときなさい。くれぐれも、坊ちゃんも、殴られないようにね」

コロンダ君は、あきれた顔で話を進めた。「僕のことは、どうでもいいのです。その女子ってのは、ハンパなく、強かったんです。殴られた警察官は、柔道三段と剣道二段だったんですが、なんと、柔道三段の警察官は、パンチを食らった上に、股間を蹴り上げられてのたうちまわり、剣道二段の警察官は前歯二本をへし折られたそうなんです。周りにいた観衆から、沖縄のジャンヌダルク、って叫ばれて、拍手喝采だったそうです」

クスクスと笑い始めたお菊さんが、笑顔で話し始めた。「それは、ますます、あっぱれじゃない。その女子学生のサインをもらいたいぐらいだわ。どこの学生さんかしらね」腕組みをしたコロンダ君は、苦虫をつぶしたような顔でトーンを落とした声で話し始めた。「それがですね、T大学の学生らしいのです。今、大学では、彼女の傷害事件のことで大問題になっているそうです。なんせ、米軍基地建設反対運動のさなかに起きた傷害事件ですからね」

お菊さんは、ますます笑顔になって話し始めた。「これは、面白くなってきたじゃない。坊ちゃんの後輩ってわけね。でも、女子学生に殴られたとあっては、警察も恥ってところじゃない」大きくなずいたコロダ君は、同意の返事をした。「そうなんですよ。確かに、警察官に傷害をおわせたことは罪なんですけど、警察としても、女子学生に殴られたとなると面目丸つぶれでしょう。そこで、この事件を表ざたにしたくないらしいのです。当然、大学側も同じなんですけど」

お茶を一口すすったお菊さんが、うなずき返事した。「その女子学生にあっぱれと言いたいところだけど、傷害をおわせたとなれば、嚴重注意ぐらいでは、すまないわね。何らかの処罰を与えなければ、示しがつかないでしょう」コロダ君は、即座に答えた。「そこなんです。彼女は、8月末までの停学処分を受けたそうなんですけど、もしかすると、退学になっているかもしれませんね。なんだか、かわいそうになって」

お菊さんも目じりを下げて悲壮な顔つきになった。「そうね、とっさに身を守ろうとして、殴ったんだろうけど、運が悪かったわね。その女子学生って、どこの出身かしらね。沖縄かしら？」コロダ君は、左手のひらを顎の下に当てるとゆっくり話し始めた。「聞くところによると、ほら、一緒に観光旅行したでしょ、博多の近くの糸島、あの田舎だそうです。もう、郷里に帰っているかもしれませんね。沖縄で傷害事件を起こし、停学処分になったと知った親御さんは、気絶して、泡を吹いたかもしれませんね」

お菊さんは、評論家のように冷たい口調で話し始めた。「闘うのもいいけど、暴力はよくないわ。野性的な九州男児は、カッコイ〜と思うけど、女子はやっぱ、上品じゃなくっちゃね。田舎の女子は、下品ってことね。坊ちゃんも、よ〜く、考えなさいよ。結婚するんだったら、京女にいなさい。素敵なお嬢様を紹介するから、一度、お見合いをしてみてもはどうです。お菊のいう通りにしていたら、間違いないんですから。坊ちゃん」

我田引水のお菊さんは、いつものようにお菊ワールドにコロンダ君を引っ張り込もうとしたが、今回ばかりは、気合を込めて抵抗した。コロンダ君は、強い口調で脱線した話を元に戻した。「お菊さん、僕の話は、もう、ほっといてください。かわいそうじゃないですか。警察も強引なことをするから、住民たちと争いが起きるのです。政府は、とことん親身になって、住民たちと話し合うべきなんです。彼女は、まったく悪くありません。僕は、学部長に直談判します。彼女を救ってやらないと、かわいそすぎます。そう思いませんか、お菊さん」

小さくうなずいたお菊さんだったが、顔を小さく左右に振った。「確かに、ヘリパッド建設は、住民たちの気持ちを無視した政策のようにも思われます。でも、坊ちゃん、政府と対立するような事件には、首を突っ込まない方が身のためですよ。もう、れっきとした自民党の参議院議員なんです。ここで、ヘマをするとマスコミの餌食になりかねません。次の選挙のためにも、はやる気持ちをグッと抑えて、傍観するのが賢明です。見ざる言わざる聞かざる、っていうでしょ。いいですね」

腕組みをしてうつむいたコロダ君は、じっと目を閉じ、しばらく、考え込んだ。ひょいと顔を持ち上げると目を吊り上げて押さえこんでいた気持ちを吐き出した。「その通りです。万が一、マスコミに嗅ぎつけられれば、おやじにも、自民党にも、迷惑がかかるかもしれません。でも、僕は、政治家生命をかけて、彼女を救いたと思います。分かってください、お菊さん」

大変なことになったと血相を変えたお菊さんは、とっさに返事した。「坊ちゃん、気を落ち着けて。退学と決まったわけじゃないんですよ。もう少し、様子を見てはいかがですか。坊ちゃんとは、何の関係もないんですから。強制排除しようとした警察官と座り込みをしていた女子学生との喧嘩は、世間では、笑い話のような話題かもしれませんが、沖縄の米軍基地の問題は、現政権の存亡にかかわっているじゃありませんか。米軍基地建設反対に賛同するような態度を示せば、自民党から追放されるかもしれません。

お父様を悲しませるようなことは、おやめになってください。もっと、大人になってください。ご存知でしょ、国会議員は、かつてない以上に監視されていることを。マスコミに嗅ぎつけられでもしたら、それこそ、取り返しがつかないことになります。坊ちゃんだけでなく、お父様の政治生命も危ぶまれることになりかねないですよ。坊ちゃん、早まったことは、なさらなくてください。お願いします」

お菊さんの言っていることは、まったく現実を見つめた意見だった。しかし、それでも、コロンダ君の気持ちは変わらなかった。確かに、無関係な女子学生の傷害事件に国会議員が口をはさむなんて、非常識極まりない。でも、万が一、退学にでもなれば、もはや取り返しがつかなくなる。また、彼女が子供のころから見続けてきた夢も失われることになる。そう考えると、引き下がるわけにはいかなかった。「お菊さんの気持ちは、わかります。でも、今回ばかりは、引き下がるわけには、まいりません」

コロンダ君の決意に負けたお菊さんは、がっかりした声で助言をした。「分かりました。坊ちゃんの好きなようにやってください。でも、決して、ことを荒立てないように、失礼がないように、くれぐれもお願いします。学部長は良識のある立派な教育者です。坊ちゃんが、誠意をもって心から懇願なされれば、きっと彼女の行く末を案じてくれるはずです。私にもお役に立てることがあれば、なんなりとお申し付けください」

コロンダ君は、父親を介して学部長と会うことにした。9月11日、学生が少ない日曜日の午後3時に学部長室で面会する約束を取り付けることができた。受付を通すと学生たちの注意をひかないように、ちょっとうつむいて足早に学部長室に向かった。学部長室のドアをコンコンとノックすると、物静かな声の返事があった。「どうぞ」その返事を確認したコロンダ君は、ドアを静かに開けお辞儀をするとゆっくりと足を進めた。二人が重厚なブラウンのソファに腰を落とすと早速学部長が話を切り出した。

「お父様から要件はお聞きしています。この件に関しては、公的な話ということではなく、ちょっとした雑談ということで、お話をさせていただいて、よろしいでしょうか」コロンダ君は、小さくうなずいたが、即座に、眉間に皺を作るとマジな顔つきでズバツと質問した。「まことに、ご無礼とは思いますが、単刀直入にお聞きいたします。彼女の処分のことですが、すでに決定がなされましたでしょうか？」

学部長は、この事件に関して、一切の他言を禁じられていた。また、この事件に関しては、マスコミにも厳重な口封じがなされていた。それにもかかわらず、この事件の情報が国会議員に漏れたことに、不覚を取ったと口惜しく思った。その反面、まったく赤の他人の救済の懇願のために、わざわざ学部長に面会に来るとは、お人よしというか、おせっかいというか、出しゃばりというか、今どき珍しい若者がいるものだとあきれ返った。

素直な回答ができない学部長は、当たり障りない程度に世間話のような話しぶりで返事することにした。小指の先で軽く頭をかきながら苦笑いをした彼は、少し前かがみになって話し始めた。「その件に関しては、まあ、大学としても、警察としても、彼女の正義感には感服しております。今どきの女子は、強くなりましたな～。彼女の正義感を無駄にするようなことが無きよう、重々配慮するつもりです」

なんとなくはっきりしない返事だったが、退学は免れたようでちょっとホッとした。「ということは、復学したということですね」学部長は、ニコッと笑顔を作り、またしても回りくどい返事をした。「今、申しましたように、彼女の夢は、育んでやりたいと思っております。彼女は、三島由紀夫以来の法学部の秀才です。でも、人生には、山あり谷ありです。若気の至りと言いますか、ちょっとした過ちで、レールから脱線することだってあります。それが人生です」

なんとなく不安になってきたコロнда君は、学部長が本当に彼女を救済する気持ちがあるのかどうか、確かめたくなった。「確かに、人生は、七転び八起きです。若気の至りで、脱線することもあるでしょう。でも、若者から正義感を取ってしまったら、何を信じて生きて行けばいいのでしょうか？大人であれば、お金や名誉で生きて行けるでしょう。でも、若者は、自分の正義を信じ、夢に向かって、生きているんじゃないのでしょうか？そこのあたりを、配慮していただけないのでしょうか？」

彼女のうわさは、大学生の間で沖縄の鉄拳女子として徐々に広まりつつあった。また、集団的自衛権と改憲案の問題において、政府と学生の間で対立するようになると、ますます、全国の大学では反政権運動デモが盛んに行なわれるようになっていた。こんな時、この傷害事件の当事者がT大学の女子学生であることが明るみになってしまえば、彼女を政権打倒のジャンヌダルクとして祭り上げ、ますます学生運動が活発化されると予測された。また、マスコミが取り上げてしまえば、昭和の安保闘争のような全国的な学生運動に発展しかねないと政府筋は懸念した。

総理は、今回の事件について悩んだ挙句、日本から追放する名案を思いついた。それは、アメリカのH大学と日本のT大学の学術交流を見据えて、彼女を国費でH大学に留学させることだった。そこで、総理は、彼女をアメリカのH大学に編入学させるように、との極秘の指示を総長に出していた。政府はもちろん、警察としても、T大学としても、米軍基地建設反対にかかわる今回の事件だけは、世間の噂になる前に一刻も早く消し去りたかった。そこで、彼女の処遇において、T大学総長推薦によるH大学への10月度編入学が決定されていた。

ほんの少し、しかめっ面を作った学部長は、テーブルの中央にある赤いシガーケースにゆっくりと右手をのぼし、細長い葉巻を取り出した。コロнда君は、召使のごとく素早くカルティエのライターをポーチから取り出し、頭を下げて火を差し上げた。分厚い唇からやわらかい紫煙をふっと吐き出した学部長は、目を細め、遠い昔を思い出すかのようなまなざしで、静かに話し始めた。

「若いということは、いいですな～。夢を追いかけ、がむしゃらに突っ走る。あの昭和の頃の学生たちも、社会の矛盾を感じ、狂ったように学生運動をやっておりましたな～。彼女には、あの頃の匂いがプンプンします。でも、今は、交際的人材を育成する平成です。老婆心ながら、彼女には、もっと、世界を見てほしい。T大学にこだわってほしくない。井の中の蛙じゃ～、いかん。きっと、今回のことで、大きく羽ばたいてくれると信じている」

コロнда君の不安は、払しょくできなかつたが、学部長の優しい心遣いは、心の底まで伝わってきた。この学部長であれば、きっと、彼女を夢に向かって導いてくれると思えた。この際、機嫌を取るために、思い切って、父親から参議院議員当選祝いにもらった大切なライターをプレゼントしようかと一瞬思ったが、わいろと受け取られてはまずいと思い、思いとどまった。

これ以上学部長に質問することは、失礼にあたると思ったコロнда君は、感謝の意を表し退出することにした。「このたびは、貴重なお時間をさいていただき、わたくしのような若輩者にご面会いただき、誠にありがとうございました。学生への優しいお気持ちを伺い、心が洗われたような心持になりました。それでは、失礼いたします」赤門から通りに出るとコロнда君は、緊張した体をほぐすように大きく深呼吸し、彼女の無事を祈り、天を仰いだ。

その夜、書齋でぼんやりと学部長の言葉を思い出していると暗号のようなお菊さんのノックの音が響いた。「どうぞ」コロнда君は、即座に返事した。ドアを開いたお菊さんは、ブルマンの香りを漂わせた二つのコーヒーカップを載せたトレイを左手に持っていた。コロнда君は、素早くお菊さんに駆け寄りトレイを受け取ると丸テーブルに静かに置いた。「坊ちゃん、ありがとう」と声をかけ静かに椅子を引き腰かけた。コロнда君も腰かけるとお菊さんの前にコーヒーカップをそっと置いた。

少し不安げな表情をしたお菊さんは、コーヒーを一口すすり、コロダ君をじっと睨み付けた。コロダ君は、いたずらをして叱られている生徒のような心持になって、目を伏せて固まってしまった。お菊さんの尋問が始まると思うと、目の前が真っ暗になった。お菊さんは、うつむいて黙っているコロダ君を問い詰めるかのように口火を切った。「どうでした？学部長とのお話は？」

はっきりとした回答を得られないまま話が終わってしまったことで、なんと返事していいか戸惑ったが、コロダ君は学部長の優しさを伝えることにした。「まあ、なんといいですか。お菊さんが言ったように、勇み足だったようです。学部長は、若者の将来を考えてくれる心優しく立派な教育者でした。彼女のことは、心配ないみたいです。きっと、今回の事件にめげず、立ち直ってくれると信じています」

お菊さんは、子供っぽい坊ちゃんをちらっと覗き見てほんの少し笑顔を作り諭すように話し始めた。「まあ、坊ちゃんの優しいお気持ちは、子供のころからお変わりありませんね。そんなやさしさは、坊ちゃんの素晴らしいところだと思います。でも、坊ちゃんも、もう少し大人になってもらわないといけませんね。大人の世界は、一歩間違えば、命とりになります。今回の件は、お父様が、穏便にお計らいなされたようですが、今後は、いつでも、ピストルの銃口が背中に押し当てられているぐらいのお気持ちで、いらしてください。おそらく、学部長は、心の中で笑っておられたことでしょう」

落ち込んでしまったコロнда君であったが、自分がやったことが間違っていたとは思いたくなかった。たとえ、子供じみた愚かな行為だったとしても、自分の言動が彼女の将来にひと役かったのではないかと思うと、ほんの少し満足感がわいていた。そうは思っても、やはり大人げなかったことは否めないと思えて、しょんぼりしてしまった。中学生のころ、宿題もせず、夜明けまでスーパーマリオをやっていたのをお菊さんに見つかり、大声で叱られ、目から火花が飛び散るぐらいの拳骨を食らい、朝飯抜きで学校に行かされた時のことが思い出された。

今にも泣きだしそうな顔でコーヒーをすする姿を目の当たりにしたお菊さんの心に、コロнда君の子供のころの面影がふんわりと浮かび上がった。この時、ちょっと叱り過ぎたのではないかと気丈な心が揺らいだ。お菊さんは、涙目をしてしょげてしまったコロнда君の機嫌を取るかのようにニコッと笑顔を作り、声をかけた。「坊ちゃん、例の鉄拳女子、ド田舎の糸島だったわね。そうだ、連休を使って、二泊三日の糸島観光はどうです。もしかしたら、彼女と会えるかも、どう、坊ちゃん」

揺らぐ正義

横山は、郷里の糸島で渡米の準備をしていた。8歳の時に京都から糸島に引っ越してきた横山にとって、糸島は第二の故郷だった。渡米すれば、子供のころよく遊びに来ていた平原（ひらばる）歴史公園ともしばしの別れになると思い、9月18日（日）、横山は、南風台（みなかぜだい）からママチャリに乗って思い出の公園にやってきた。ベンチに腰掛け青空を見上げた時、小学生のころ、友達と一緒にやってきて夕暮れまで無邪気に遊びふけたあの頃が思い出された。約十年の月日が経ったにもかかわらず目の前の風景は、鮮明に思い出されるあの頃の公園の風景とほとんど変わっていなかった。

ベンチに腰掛けぼんやり高祖山（たかすやま）を眺めていると突然、右横から甲高い少年の声で呼びかけられた。「お姉ちゃん、何やってんの？」その声の主は、この公園を遊び場にしている小太りの愛称ヒフミンだった。横山は、即座に返事した。「あら、君も、この公園、よく遊びに来るの？」彼女に興味をわいたヒフミンは、目を大きく見開いて尋ねた。「友達いないの？ポッチ？」最近、渡米の準備のため一人ぼっちで過ごすことが多く、よくよく考えてみれば、友達がいなくても同然だということに気づいた。

「そうね～、いないことはないんだけど、最近、渡米の準備でポッチなの。もうすぐしたら、本当に、友達とお別れしちゃうし。だから、懐かしくなって、子供のころ遊んだこの公園に遊びに来たってわけ。君もポッチかな？」ヒフミンは、一瞬うつむいたが、マジな顔つきで答えた。

「僕もいないことはなんだけど、友達は、塾だったり、習い事だったり、家族旅行だったり、みんな、忙しいみたいなんだ。だから、僕もポッチ」

薄汚れた服装をしていたがなんとなく人のよさそうなヒフミンに好感を持った横山は、突っ立っているヒフミンを右隣に腰かけるように手招きした。「君、ここに座りなよ。あの高祖山を見ると心が落ち着くから。さあ」ヒフミンは、ちょっとはにかんだ笑顔を作り、頭をかきながら自己紹介をした。「僕は、糸島小学校4年生、ヒフミンと言いま～～す。よろしく～～」言い終わるとヒフミンは、照れくさそうに一人分の間隔を置いて右隣に腰かけた。

傷害事件を起こし、挙句の果てアメリカの大学に追放された横山は、一人静かに自分の気持ちを今一度確かめていた。日本は憲法を遵守する法治国家と思っていたのに、なによ、警察、機動隊まで出動させて、ヘリパッド建設に反対する住民の座り込みを力づくで排除するなんて。絶対、あんな武力行為は、許せない。日本国憲法は平和主義なのよ。さらに、平和主義を無視した憲法を作ろうとするなんて、絶対に許さないから。

横山の両手の握りこぶしは、小刻みに震えていた。紅潮した横山の横顔を見たヒフミンは、一瞬、人間の顔をした赤鬼じゃないかと思った。気味が悪くなったヒフミンは、立ち去ろうとしてそっと腰を持ち上げた。立ち上がろうとしたヒフミンに気づいた横山は、とっさに声をかけた。

「あ、ごめん、ちょっと考え事をしてしまって。そう、チョコポッキー食べない？」

チョコが好物のヒフミンは、ニコッと笑顔を作り、うなずいた。横山は、ショルダーバッグからポッキーを2本取り出し、ヒフミンに差し出した。日焼けした指先でポッキーをつまみ取り、お礼を言った。「ありがとう。僕、チョコが大好きなんだ。食べ過ぎて、こんなに太っちゃった。みんなから、コブタ、コブタって言われちゃって、へへ〜」ヒフミンは、おいしそうにポッキーをポリポリと食べ始めた。

無邪気なヒフミンを見つめているとコブタの夢を聞いてみたくなった。「君、将来何になりたいの？」突然、質問されたヒフミンは、もぐもぐさせていた口を一瞬止めたが、一気に野良猫のようにガツガツガツとかみ砕き、口の中のポッキーをグイッと飲み込んだ。「え、何になりたいかって？今のところ、軍事工場の工場長かな。ぼくんち、貧乏だから、小学校を卒業したら、軍事工場で働くんだ。お姉ちゃんは？」

横山は、裁判官と言いたかったが、傷害事件を起こしアメリカの大学に追放されることになった今の自分を考えたとき、その言葉を口に出せなかった。ちょっとヒフミンから顔をそむけ、即座に、思いついたような表情をすると、ニコッと笑顔を作り返事した。「まあ、あるようで、無いような。まだ、はっきりしないんだ。もっと勉強して、それから決めようかと思ってる。お姉ちゃん、意外と、バカだから」

バカと聞いたヒフミンは、急に親近感がわいてきた。「え、それじゃ、僕と同じだ。僕もバカなんだ。勉強ができない将棋バカってやつだけど」無邪気なヒフミンを見ていると自分の気持ちに素直になれるような気になってきた。「へ～、将棋バカ、ってことは、将棋が得意ってことだな。すごいじゃない。お姉ちゃんにも得意なものがあればいいんだけど。全然、パツとしないんだよな～。渡米して、頭でも冷やせば、ちょっとは、賢くなるかも」

ヒフミンは、トベイという言葉は初めて聞いた。甘いしょうゆ味のセンベイは大好きで、よく食べていたが、トベイというセンベイがどんな味なのか聞いてみたくなった。「お姉ちゃん、トベイって、どんな味？僕は、甘いしょうゆ味が好きなんだ」横山は、一瞬、この質問の意味が分からなかった。渡米の意味を聞いているのではなく、味を聞いている。しかも、甘いしょうゆ味が好き。ヒフミンは、トベイをお菓子のセンベイと勘違いをしていると直感した。

勉強が出来ない将棋バカと自分から言うだけあって、この勘違い質問は、将棋バカのヒフミンらしいと心で笑った。トベイって、お菓子じゃないのよ、ときつい口調で返答しそうになったが、短気は損気、と自分に言い聞かせ、グツと気持ちを抑えて、ちょっとからかってみることにした。「トベイって、どんな味かって？そうね、ちょっと苦いかな。そう、涙が出るかも。良薬口に苦し、ってことわざもあるし。でも、シュワ～～、って感じもあるような。まあ、そんな味かな」

ヒフミンは、まったくわからないというような顔で口早に質問した。「もっと、分かりやすく、言ってよ。かたさとか、どこで売っているとか、他にどんな味があるのとか、お姉ちゃんの言ってること、チンプンカンプンで、ちっともわかんない」横山は、ケラケラと笑って、からかうのをやめることにした。「今は、冗談。トベイって、お菓子のセンベイの一種じゃないのよ。からかって、ごめんね。アメリカ合衆国、漢字書くと米国になるんだけど、米国に行くことをトベイっていうの。初めて聞いた？」

アメリカ合衆国と聞いたヒフミンは、自分の質問があまりにもバカげていることに気づき、穴があれば入りたい気持ちで、顔を真っ赤にした。「なんだ、センベイじゃなかったのか。やっぱ、俺って、バカだな～。トベイって、初めて聞いたよ。米国は、社会の時間に習ったな。米国に行くことをトベイっていうのか。トベイって、漢字で、どう書くの？」横山は、すっと立ち上がると、ベンチの前の地面に大きく“渡米”と真っ白いスニーカーのつま先で書いた。

つま先を真剣に見つめていたヒフミンは、文字が完成すると大きな声でワハハと勘違いを笑った。「へ～、渡るとお米か、そう、授業のとき不思議に思ったんだけど、どうしてアメリカがお米なの？アメリカもお米を食べるの？アメリカは、牛肉を食べるんじゃないの。アメリカは、米国じゃなくて、肉国だと思うんだけど」素直に疑問を持つヒフミンは、学校では恥ずかしくて口にできない質問をした。

横山は、“渡米”の文字の上に同じようにつま先で“米利堅”と楷書で書いて、説明することにした。「お姉ちゃんも不思議だったの。そこでちょっと調べてみたの。アメリカのアを弱く、メを強く、発音すると、昔の人は、アメリカがメリケンって聞こえたみたいでね、このメリケンを漢字の当て字で“米利堅”と書いたんだって。だから、最初の文字の“米”を取って、アメリカのことを“米国”っていうようになったんだって。面白いよね」

“米利堅”の文字をしかめっ面で見入ったヒフミンは、物知りの横山を尊敬のまなざしで見上げ、コクンコクンとうなずいた。そして、漢字が苦手なヒフミンは、難しい漢字をスラスラと書いた横山に感嘆の声で尋ねた。「お姉ちゃんって、すごく、頭いいんだね。僕の何倍も賢いじゃないか。さっきは、バカって言ってたのに。お姉ちゃんは、高校生？」大学生と答えたかったが、事件を起こして追放されてしまったことを考えると、素直に返事できなかった。

「今は、大学に入るために、勉強をしているというか、頭を冷やしているというか、まあ、宙ぶらりんの浪人って感じかな」ヒフミンは、浪人という意味が今一つピンと来なかったが、分かったふりをして話を続けた。「ロウニン、ってことは、貧乏ってことだから、バイトもやってるってことだな。力もありそうだから、ガッツリ稼げるよ。ガンバ」ますます、話が食い違ってきたが、純朴なヒフミンと話をしていると、なんとなく愉快になってきた。

ヒフミンの素直な気持ちに触れて、自分はどうかんだろうかと思った。正義だと思って、あの時、怒りの鉄拳を振るったが、それは、本当に正義だったんだろうか？もしかしたら、独りよがりだったんじゃないだろうか？考えれば、考えるほど、分からなくなった。日本国憲法を誇りに思い、この日本国憲法を守るために裁判官になりたいと思った。でも、日本国憲法は本当に素晴らしい憲法なのだろうか？と思い始めると裁判官になる夢までもふらつき始めてしまった。

急に考え込んだ横山は、不安げな表情でうつむいた。肩を落とし暗い顔の横山に気づいたヒフミンは、何かいじめるようなことを言ったんじゃないかと不安になった。とっさに、ほめ言葉を発した。「お姉ちゃん、かわいいから、モテるでしょ」可愛いと言われた横山は、ハッと我に返り、笑顔を作った。この子は、勉強はできそうもなかったが、お世辞は、なかなかのものだと感心した。「気を使ってくれて、ありがとう。お姉ちゃん、もうすぐしたら、アメリカに行っちゃうじゃない。だから、なんとなく寂しくなっちゃって。ごめんね」

せつかく友達ができたと思ったのに、すぐに分かれてしまうと思うとヒフミンもなんとなく寂しくなってしまった。「アメリカに行っちゃうのか。何しに、アメリカに行くの？出稼ぎ？学費を稼ぐため？日本のバイトじゃ、ダメなの？バイト、クビになったの？僕も、一緒に探してあげようか？」横山は、必死に心配してくれるヒフミンの思いに胸が熱くなり、即座に返答できなかったが、ちょっと首をかしげて返事した。

「そうね、出稼ぎでも、お金を稼ぐんじゃなくて、知識を稼ぎに行くって感じかな。夢に向かったの勉強ね。東京の大学も、いいと思うんだけど、アメリカの大学にチャレンジすることにしたの。アメリカに行っても、バイトは頑張るけど、もっと、もっと、勉強して、自分を見つめようと思うの。ヒフミンのように素直な気持ちで。ヒフミンに会えて、お姉ちゃん、勇気がわいてきた。メソメソしても、しょうがないし。前進あるのみ。よし、ヒフミンに今度会うときは、胸を張って、夢を語って見せる。よっしゃ」右手に拳骨を作り、こぶしを思いっきり突き上げた。

学生運動

沖縄の東村高江（ひがしそんたかえ）で警察官に怒りのパンチを食らわせた謎の鉄拳女子のうわさは、全国の大学全共闘集会で話題になっていた。また、彼女の勇猛果敢な行為に触発されてO大学全共闘による米軍基地建設反対運動は、より一層鼓舞され活発化した。一方、ますます米軍基地反対住民と警察、機動隊の対立が激化する中、F大学全共闘代表を務める安田は、沖縄における米軍基地建設反対闘争の参加者を全国の大学に呼びかけていた。

政府は、全国の警察官、機動隊員を沖縄に送り込み、住民の反対運動を完全に抑え込む方針を打ち出していた。そして、徐々に、彼らによって沖縄住民たちによる米軍基地反対運動は鎮圧されつつあった。沖縄闘争には無関心であった地方の護憲派の学生たちも、武力行使を平然と容認する現政権に危機感を感じはじめ、平和主義の理念のもと全共闘の旗揚げを行い、沖縄闘争参加を希望し始めた。F大学全共闘では、沖縄闘争を全国規模の反戦闘争と発展させるべく、10月度のF大学全共闘決起集会実施が立案されていた。

謎の鉄拳女子のうわさは、沖縄闘争に無関心な女子大生や女子高生の間でも噂になっていた。その噂は、F大学生のゆう子の耳にもいつの間にか入っていた。ゆう子は、二丈に住んでいる親友リノと前原に住んでいる横山の子分、理絵を前原のマックに集め、謎の鉄拳女子のうわさをささやき合っていた。ゆう子は、理絵に高校での噂を聞いた。「あの鉄拳女子、高校でも、噂になってる？」

理絵は、うなずき、身を乗り出してささやくように答えた。「めっちゃ、みんな、騒いでるよ。すごくない。警官二人を殴り倒したんでしょ。鉄拳女子って、女子大生なの？それとも女子高生？」鉄拳女子の素性は、いまだ謎だった。リノは、ゆう子を疑うような目つきで尋ねた。「ゆう子、鉄拳女子のこと、知ってんじゃない。F大生だから、いろんな情報が入ってるでしょ。隠さずに、話しなよ」

ゆう子は、一瞬身を引いて、ブルブルと顔を左右に振って、返事した。「知らないったら。大学でも、鉄拳女子のうわさで持ち切りだけど、誰一人として、彼女の素性を知っている人はいないみたい。安田に聞いても、知らない、って言ってたし。全共闘にも彼女の詳しい情報は、入っていないんだって。まったく、いったいどこの女子だろうね。沖縄の女子大生かな～？」

安田も知らないと聞いたリノは、ますます鉄拳女子に興味を抱いた。「とにかく、すごいじゃん。勇気あるよね。でも、すぐに、警察に連行されたんでしょ。その後、どうなったんだろうね。ブタバコにぶち込まれた、ってことはない？」ゆう子と理絵は、申し合わせたように眉をひそめた。ゆう子は、心配そうな表情で話し始めた。「無きにしもあらず。警官二人も殴り倒したんだから、単なる説教じゃ、すまないわよ。もし、学生だったら、退学じゃない」

コクンコクンとうなずいたリノは、ストローから唇を外し甲高い声を出した。「マジ、やばくね〜。きっと、退学よ。女子大生であれ、女子高生であれ、退学は免れないって感じ。でも、年老いたおばあちゃんを放り投げる警官を見たら、誰だって、パンチ食らわせたくなるし。マジ、犬ヤローには、ムカツク」ゆう子は、とっさに人差し指を唇に当てた。「リノ、もっと小さな声で」リノは、キョロキョロと周りを見渡した。

理絵が、不安げな顔でゆう子に尋ねた。「横山先輩、全共闘に参加してるの？ T大って、学生運動が盛んなんでしょ。昭和の安保闘争のときは、女子大生がデモの最中に死んだんでしょ」二人が夏休みに会った時には、まったく、学生運動のことは話題にしなかった。ゆう子は、少し顔をしかめて返事した。「横山は、司法試験の勉強で頭がいっぱいじゃない。学生運動どころじゃないと思うよ。将来、裁判官になるって、言ってたから」

不吉な予感がしたリノは、ゆう子にお願いした。「ゆう子、一度、横山に連絡取ってみて。横山ってさ、人一倍、正義感が強いじゃない。もし、学生運動やってたら、ほどほどにしときなって」学生運動にのめり込んでしまって、取り返しのつかないことになりはしないかとゆう子も不安になった。「わかった。今夜にでも、横山に連絡とってみる。バカなことはしないと思うんだけど。とにかく、一本気だから」

その時、ゆう子の背後から安田のダミ声が響いた。「よ～、ガールズトークですかな」後ろに鳥羽を従えた安田は、女子たちの気をひくような声をかけると、リノにチラッと目線に向けて、立ち去ろうとした。リノは、即座に安田を引き留めた。「ちょっと、逃げなくたって、いいじゃない。ちょっと、聞きたいことがあるのよ。そこに座りな」安田は、浮気の現場でも見られたのではないかと思い、頭をかきながら隣のテーブルに席を取った。

リノは、早速、謎の鉄拳女子のことを尋ねた。「今、話してたんだけど、鉄拳女子について、何か知らない？何か知ってるでしょ、全共闘の親分なんだから。素直に、白状しな」安田は、詳しい事実は知らなかったが、彼女の風貌については、ちょっとだけうわさで聞いていた。「いや、本当に、知らないんだ。まあ、聞くところによると、ぽっちゃり体形で、二の腕が太い、バリカワイ～女子だったらしい。ぜひ一度、会ってみたいもんだ」

リノは、カワイ～とにやけた顔で言ったことにムカついたのか、目を吊り上げて質問した。「そんなことじゃなくて、大学生なの？高校生なの？沖縄の人なの？どうなの？」安田は、矢継ぎ早の質問に顔をしかめてしまった。話していいものか迷ったが、ここだけの話として話すことにした。「ここだけの話だけどさ。誰にも言うなよ。絶対にいうなよ。いいな。極秘情報だからな」

じれったい話し方に、リノは切れてしまった。「さっさと、いいな」リノの怒鳴るような声に目を丸くした安田は、椅子をゆう子たちのテーブルに引き寄せて、周りの者に聞こえないように小さな声で話し始めた。「あのな、あの女子、あくまでも、噂だぞ。T大の女子らしい。あくまでも、噂だぞ、いいな」ゆう子たちは、あっけにとられて、目をパチクリさせて、のけぞってしまった。リノが、悲鳴のような声を上げた。「マジ～～」

三人は、同じ不吉な予感を同時に感じていた。ゆう子は、つぶやいた。「まさか？」リノも理絵も、つぶやいた。「まさか？」安田は、リノに尋ねた。「何が、まさかだ？」リノは、安田の鈍感さにあきれてヒントを出した。「T大生で、正義感が強くて、腕っぷしが強い女子っていえば、ほら、わかんない？」安田も、ハッと気づいた表情を作り、つぶやいた。「まさか？」鳥羽は、4人のあっけにとられた顔をじっと見渡し、首をかしげていた。

お婆～の祈り

コロンダ君とお菊さんは、9月17日（土）、二泊三日の糸島（いとしま）観光に旅立った。広範囲の移動にはタクシーよりレンタカーの方が便利ということで、コロンダ君は、出立前日に黄色が好みのお菊さんのことを考えて、黄色いスズキ・スイフトスポーツを福岡空港から徒歩約5分のオリックスレンタカーで予約した。午前9時10分に福岡空港に到着後、スマホのマップを頼りに、二人は空港からオリックスレンタカーまで歩いて行った。そこには、ピカピカと光り輝く黄色のスイフトスポーツが待っていてくれた。二人は、笑顔でシートに飛び込むと、第一の観光先である九州国立博物館に向かった。

レンタカーの受付嬢によると旧3号線の112号を走るより、都市高速の方が早く着くということで、都市高速を利用することにした。金の隈（かねのくま）ICから都市高速に乗り上げ、水城（みずき）ICで降りると、所要時間20分ほどで全国的にも大規模な全面鏡張りの九州国立博物館に到着した。九州国立博物館を見学後、二人は太宰府天満宮で参拝することにした。コロンダ君は、勇気ある女子大生の無事を祈願し、お菊さんは、恐れ多くも学問の神様である菅原道真公（すがわらのみちざねこう）に“より美しくなりますように”と心でつぶやきお願いした。

参拝後、二人は、梅ヶ枝餅（うめがえもち）が有名な京風の“かさ屋”で食事を済ませ、糸島市二丈（いとしましにじょう）を目指し西に向かって都市高速を突っ走った。今宿ICで降りるとのんびりと海岸沿いの202号を西へ西へと走り、宿泊先の喜八荘（きはちそう）へ向かった。午後6時のチェックインまでまだ観光する時間がありそうだったので、途中、より道をする事にした。

観光マップで二丈の観光スポットを調べると、大入駅から南へ向かったところに面白そうな観光スポットを見つけた。二丈福井にある加茂（かも）川上流にかけられた全長100メートルのつり橋“加茂ゆらりんこ橋”と二丈溪谷（にじょうけいこく）でもっとも人気のあるスポット“明神の滝（みょうじんのたき）”に行ってみることにした。つり橋から眺めることができる玄界灘（げんかいなだ）に感動したお菊さんは、いつもは、タヌキが出没するようなド田舎をバカにしていたが、この時ばかりは風光明媚なド田舎の糸島を見直した様子だった。

翌日、喜八荘で朝食を済ませた二人は、旅館を9時に出立し、風光明媚な海岸沿いの202号を東に向かって7分ほど走り、右手の深江（ふかえ）駅を少し過ぎたT字路を右折して49号に入った。そこから6分ほど走ると右手に見える伊都垂蔵里（いとあぐり）をほんの少し過ぎてすぐの八反田（はったんだ）交差点を右折した。そこから曲がりくねった坂道をズンズンと15分ほど登っていくと羽金山（はがねやま）中腹にある県指定名勝の“白糸の滝（しらいとのたき）ふれあいの里”に到着した。そこでお昼までブラブラ散策して、昼食には名物のヤマメ定食を食した。

昼食後、今夜の宿泊先、深江観光ホテルの午後6時のチェックインまでまだ十分時間があるということで、平原歴史公園に行くことにした。曾根（そね）丘陵に位置する平原遺跡（ひらばるいせき）は、弥生時代後期の伊都国（いとこく）王墓で、世界一大きい銅鏡が出土したことで知られる遺跡だった。コロダ君は、都会の汚い空気を思いっきり吐き出して、田舎のきれいな空気をおなか一杯吸い込んだ。お菊さんは、年のせいなのか、疲れた模様の、公園のベンチに腰掛けると、東方向に見える糸島半島に鎮座する高祖山をのんびりと眺めた。

少し疲れ気味のお菊さんを気遣って、公園の南側に見つけた甘党茶屋で一服することにした。「お菊さん、ちょっと先にある茶店で一服しましょう。少し、お疲れになられたでしょう。お菊さんの好物、ぜんざいがあるかもしれません。甘いものを食べると、元気が出るんじゃないですか？」お菊さんは、ぜんざいを思い浮かべニコッと笑顔を作った。「ぜんざい、あるかしら？」コロダ君は、お菊さんと腕を組み、彼女をいたわるようにゆっくり歩き茶店に向かった。

二人が引き戸を開くと「いらっしやい」と明るくかわいい少女の声が二人を歓迎した。「窓際の席に二人が腰かけると少女が注文を取りにやってきた。「何にいたしましょうか？」お菊さんは、お品書きをチラッと見て、ぜんざいに目が留まると即座に注文した。「お嬢ちゃん、ぜんざい、いただくわ。坊ちゃんは？」コロンダ君も少女に笑顔を向けて注文した。「同じく、ぜんざい」

少女は、注文を繰り返した。「ぜんざい二つですね。しばらくお待ちください」少女は、ちょこまかと厨房にかけて行った。「ぜんざい二つ」大きな元気のいい声が客席まで響いてきた。コロンダ君は、ぼんやりと窓の外を眺めていると昨日、ちょっと気になった新聞記事を思い出した。それは、座り込み住民の間では、結構有名なおばあさんの意見だった。その内容は、辺野古移転問題と例のヘリパッド建設反対に関するものだったが、その中に、例の鉄拳女子に関するものではないかと思われるものがあつた。

「お菊さん、昨日のA新聞に、ヘリパッド建設反対の座り込みを続けているおばあさんへのインタビューの記事があつたんです。辺野古移転問題とヘリパッド建設反対に関して沖縄県民の政府への怒りが述べられていたんですが、そのなかに、おそらく例の女子学生について語っているような記事があつたんです」お菊さんは、興味深そうに身を乗り出し相槌をうった。「ほ～～、それで」コロンダ君は、気にかかった部分を思い出しながら話すことにした。

「今、住民たちは、ヘリパッド建設反対の座り込みを命がけでやってる。何度、力づくで排除されても、座り込みはやめない。つい先日、年より思いの正義感の強い若者から感動をもらった。今どきの若者は、軟弱で頼りないと思っていたが、肝が据わった若者もいると分かって、若者を見直した。今まで、生きてきた甲斐があった。できることなら、死ぬまでに、もう一度、あの猛者（もさ）に会いたい。

こんなことが、話の最後の方に書いてあったんです。この文章からすると若者は男性のように受け取られますが、おばあさんは、傷害事件を起こした女子学生の今後のことを気遣って、このような言い回しをしたんじゃないかと思うのです。でも、おそらく、例の女子学生のことを言うんだと思います。思うんですが、彼女は、おばあさんの悲痛な叫び声を聞いて、頭に血が上り、あんなことをしでかしたんじゃないでしょうか？」

お菊さんは、目をつぶり聞き入っていたが、一度うなずき、返事した。「おそらく、そうだろうね。悲痛な叫びを聞けば、誰だって、頭に血が上るさ。警官に立ち向かうなんて、誰にでもできることじゃない。まったく、若気の至りというか、大人げないというか、無謀というか、正義感が強いというか」お菊さんは、口ではほめなかったが、勇気ある彼女を心では尊敬していた。

お菊さんが、話し終えたころ、糸島のド田舎にふさわしくないモデルのような美人が、ぜんざいを運んできた。「お待たせいたしました」ぜんざいを二人の前に差し出すと、美人ウエイトレスは、軽く会釈をして奥に引っ込んでいった。かわいい少女は、厨房入口横の小さな丸椅子にちょこんと腰かけ、来客を待っている様子だった。「お菊さん、びっくりしましたね。こんなド田舎にも、あんな美人がいるんですね」

お菊さんも久々に自分より美人を見たとき目をギョロっとさせて、うなずいた。「まったく、悔しいけど、スタイルも顔も、ちょっとそこらでは見ることができないハイレベルの貴婦人ね。この土地の人だろうか？」コロンダ君も信じられないって感じの顔をして、厨房の入口に目をやった。「お菊さん、あの子、美人の子供ですかね」お菊さんは、ちょっと首をかしげて、返事した。「そうじゃない。でも、あまり似てないわね」

ガラガラと入口の引き戸の音が鳴ると少女がひよいと飛び上がるように立ち上がり、声をかけた。「いらっしやい」入口から小学生と思われる小太りの男子とお姉さんらしき眼鏡をかけた17, 8の女子が現れた。「ヒフミン」少女が少年に声をかけると即座に笑顔で返事した。「お客さんを連れてきたぞ。お姉ちゃん、ここがいい。さあどうぞ」少年は、眼鏡の女子をコロンダ君たちのテーブルの隣に案内した。

少年は、腰を下ろすと即座に、眼鏡の女子に話しかけた。「あのね、きつとびっくりするから、亜紀ちゃんのお母さん、チョ～～美人なんだから」少女は、眼鏡の女子の隣に立ち、注文を取った。「何にいたしましょうか？」眼鏡の女子は、お品書きを見ずに注文した。「ぜんざいを二つ、お願いします」眼鏡の女子は、ニッコと笑顔を作り、右手でブイサインを出した。少女は、チラッと少年を見ると厨房にかけて行った。

少年は、少女が立ち去ると眼鏡の女子に話しかけた。「お姉ちゃんのおうち、ここから近いの？」眼鏡の女子は、即座に返事した。「南風台（みなかぜだい）。ママチャリで20分ぐらいかな。君は、この近く？」少年も笑顔で答えた。「すぐ近く。ここから歩いて5分ぐらいのところ。せつかく、友達になれたのにな～。そう、さっきの注文を取りに来た女の子、友達なんだ。亜紀っていうんだ。お姉ちゃんみたいに、バリ頭がいいんだ」

眼鏡の女子が店内を見渡していると先ほどのモデルのような美女がぜんざいを運んできた。「お待ちいたしました。あら、ヒフミンのお姉ちゃん？」ヒフミンは、自慢げに返事した。「今、公園でお友達になったお姉ちゃん。ぜんざい、おごってくれるって。ラッキー」ヒフミンは、話し終わると即座に、ぜんざいをすすり始めた。「この子は、亜紀のお友達なんです。やんちゃ坊主ですけど、よろしく」美女は、軽く会釈をすると立ち去った。

眼鏡の女子は、右手の中指で眼鏡をちよいと押し上げると小さな声で話し始めた。「本当に美人ね、モデルみたい。糸島の人じゃないでしょ。どこの出身かしらね」ヒフミンは、お椀から口を外すとドヤ顔で答えた。「亜紀ちゃんが言った、秋田だって。それと、バリ、金持ちなんだぜ。バリ高そうな外車、二台も持ってるんだ。でも、亜紀ちゃんのお父さんは、病気で亡くなったんだって」

コロンダ君は、じっと二人の話を盗み聞きしていた。小太りの少年の名は、ヒフミンで、眼鏡の女子は、南風台に住んでいるヒフミンの友達。注文を取りに来た少女は、ヒフミンの友達の亜紀。ぜんざいを運んできた美人は、秋田出身の亜紀の母親。亜紀の父親は、病死。情報を整理するとお菊さんに話しかけた。「あのかわいい少女、美人の子供でしたね。でも、なぜか、似てませんね」お菊さんは、うなずいて返事した。

人目を気にしない少年は、大きな声で眼鏡の女子に質問した。「アメリカから、いつ帰ってくるの？帰ってきたら、また、遊ぼうね」眼鏡の子は、寂しそうな表情で答えた。「そうね、年に一度くらいは、帰ってこれそうだけど、まだ、はっきりしないの。初めての留学だから」がっかりしたのか、少年は、顔をしかめてうなずいた。「それじゃ、もう、会えないかも」

眼鏡の女子は、笑顔を作り話し始めた。「帰ってきたときは、このお店に来るね。その時は、亜紀ちゃんも一緒に遊ぼう。何年、アメリカに住むことになるか、分からないけど、きっと、会えるよ。それまで、お互い、ガンバ」少年は、大きなため息をついて返事した。「しょうがないな。お姉ちゃんの夢のためだ。きっとだよ。帰ってきたら、このお店に来てよ。約束だよ、いい。ほんと～～に、来てよ」

眼鏡の女子の話から彼女が渡米することが分かった。「お菊さん、彼女、アメリカに留学するみたいですね」お菊さんは、高卒なので大学のことはよくわからなかったが、かなりの秀才ではないかと思った。「勉強が、好きなんじゃない」眼鏡の女子は、ぜんざいを食べ終わるとお茶をすすりぼんやりと窓の外を眺めていた。八角形の壁時計に目をやると約束を思い出したかのように突然立ち上がり、「おあいそう」と少女に声をかけた。

お愛想を済ませると少年に向かって「そいじゃ、またね」とさよならを言って静かに出て行った。コロンダ君もそろそろ帰ろうかと思った時、少女が、取り残された少年のところに駆け寄った。「ヒフミン、あのお姉ちゃん、アメリカに留学するみたいだったけど、なんだか、寂しそうだったね。どうしてだろうね」ヒフミンは、首をかしげてつぶやいた。「よくわかんないけど、しかめっ面で、東京の大学って、自分には向かない、とか言ってた」いったいどういうことかピンと来なかったみたいで、少女はきよとんとした顔で首をかしげていた。

コロнда君は、東京の大学と聞いて、もしかして、今の眼鏡の女子は、例の鉄拳女子ではないかと思った。コロнда君は、とっさに飛び出し、眼鏡の女子の後を追いかけたが、彼女は、ママチャリでゆっくり大通りに向かって下っていた。大声で呼び止めようかと思ったが、なぜか、言葉が出てこなかった。あとを追いかけてきたお菊さんは、いったい何事が起きたのだろうかと興奮して尋ねた。

「坊ちゃん、どうしたんです。突然、飛び出したりして」コロнда君は、今の気持ちを話し始めた。「今の眼鏡の女子、きっと、例の女子学生ですよ。ピンときたんです。郷里に戻っていたんですね。留学と言え、世間体はいいですが、間違いなく、国外への追放ですよ。大学も、いい手を考えついたものです。学生運動の火種を一つ消すことができ、心の中では、ほくそ笑んでいるんじゃないですか。だから、彼女はなんとなく寂しそうだったんです」

二人は、寂しそうに去っていく彼女の後姿をしばらく見つめていた。彼女の姿が消え去るとお菊さんがつぶやいた。「あの子だったら、やれるさ。自分の信じる道を歩めばいい。きっと、もっと強くなって、戻ってくるさ。警官二人も、ぶん殴ったんだ。頑張るんだよ。肝っ玉お婆〜も、陰ながら応援してるし。女性総理大臣を目指して、頑張るがいい」コロнда君もうなずき、こんな田舎町に世界に誇れる女子がいると思うと、近い将来、日本にも女性総理大臣が誕生するような気がした。